浄土十勝箋節論巻上　巻第四章目

立宗根本勝　初紙
墳籍逞躒勝　七紙
該教行益勝　十三紙
超絶師範勝　十五紙
自解他宗勝　二十三紙
精進苦節勝　二十五紙
頓中頓教勝　二十八紙
小聖住報勝　三十紙
凡愚住報勝　三十八紙
不求世楽勝　三十九紙

浄土十勝箋節論巻上　坤上

菩薩大乗戒比丘澄円撰

立宗根本勝第七

窃に以れば田主の賢明は是れ万君の模様なり。真宗の建立は迺(すなわ)

ち諸宗の濫觴なり。原ぬるに夫れ漢明永平の中年に日月の二聖、志を一にし、力を勠て釈氏、氏の墳籍を負いて来朝せしより以降、晋の武帝、太元中に至るまで三百余迴を歴たり。其の中間に於て入仏の捷径を開示するの賢聖、多からずと為さず、然りと雖も宗旨を弁立し、時教を勘判するの人、全く無し。爰に慧日中春三五の青嵐に隠れ、法水、抜提金河の夜の灘に涸れて自りの後、一千余年に当りて慧遠く索多し正く仏記を受て神識を母胎に降して誕応を支那に示し、終に使て東晋の武帝、太元中慣鬧を絶離し、廬阜に胡跪して而も居り、客を送るにも虎渓に留りて、影、俗塵に入らず。跡を隠して三十載を歴れども、而して足、山脚を履まず。十八之賢士を招き、千余之皂白に集めて、廬を結びて蓮社と号して、以て六字称楊の妙行を勤じて、池を掘り、菡萏を栽えて、以て四種曼陀の色馥を恋う。爾じ自り以往かた、浄土真宗の教行天下に弥綸し、廬山一家の脈譜率土に充溢せり。敢て問う。之れ答う。四教三観の宗旨は斉朝に至りて始て河淮に起こり、二蔵三転の詳判は陳・隋二代に至りて善く能く興盛す。設い什公を立てて

以て漢朝の始祖と為すと雖ども、廬山の建宗に殿(おく)れたること一十余載か。達磨西来の心宗は、北魏に初て顕われ、地論・摂論の二宗も梁朝に始て立ち、五教浅深の生起は巨唐の始めに興す。三時三宗の 実法仮名円教宗 の廃立は唐初より起こり、諸四曼三密の秘教は盛唐に将来す。又た倶舎・成実の両家も中古より宗たり。凡そ弁覚大師爾前には、未だ曽て此等の諸宗は有らず。此の義、智人皆之れを知る。庸愚、慮ること莫れ。曰く、敢て問う。之れ答う。慧遠菩薩自ら云く、(1)

又た諸の三昧、其の名甚だ衆けれども、功高くして進み易きは念仏を先と為す已上。

『楽邦文類』に云く、(2)

時教は仏説を本とすと雖も、然も時教を洪(おおい)にすることは、必ず天台を以て始祖と為す。律蔵は仏制を本とすと雖も、然も律蔵を張ることは、必ず南山を以て始祖と為す。禅宗は仏心を本とすと雖も、然も仏心を伝うることは、必ず達磨を以て始祖と為す。浄土に生ずることを勧むは、固くなに大覚慈尊

(1)「念仏三昧詩集序」の一節で、道宣『広弘明集』（正蔵五二・三五一・中）に引用文あり。

(2)宗暁『楽邦文類』（正蔵四七・一九二中）。

より出でたり。然れども此の方の人をして念仏三昧有りと知らしむることは、応に遠公法師を以て始祖と為すべしと上已。

高宗皇帝御書の蓮社の記に云く、(3)

臣嘗て天竺の書を読むに、出世間に所謂極楽国なる者の有ることを知る。国に仏有り。阿弥陀と号す。至乃始には国を亨けて位を履しかども、捐て去りて居ら弗んば、超然として独り覚り、心を悟り、聖を証して大願力を以て、普く一切を度す。至乃日用の中に於いて、能く一念を発して、彼の仏号を念ずれば、此の一念に即して清浄純熟し、円満具足す。至乃慧遠が結社の遺意に倣うて、日に妻子を率して、仏を課すこと万過、至乃倡仏の声、潮汐の江に騰るが如しと上已。

又た沈璿が曰く、(4)

釈迦如来世に出現して種種の法を説きて衆生を接引し、種種の門に於て最も捷径なる者は、以て西方安養の教より易きは無し。嗚呼、無量寿仏の四十八願無くんば、則ち西方の教、以て其の端を啓くもの無けん。釈迦如来の諸経を演説するこ

(3) 宗暁『楽邦文類』（正蔵四七・一八八上）に引用文あり。

(4) 宗暁『楽邦文類』（正蔵四七・一七四下）に引用文あり。

と無くんば、無量寿仏の願、以て世に伝うること無けん。前仏は願を前に作し、後仏は経を後に説く。此の道、章明著較なり。信ずべし。疑うこと無かれ。至乃惟みるに、茲の修行安養の方は、無量寿仏、実に之れを製し、釈迦如来実に之れを筆す。之れを択び之れを伝え、之れを習うて、以て後人に貽す者は、東晋の遠公其の人なり。至乃予め輒わち其の始末を識れりと為す。因みに之の言を為して曰く。堯舜禹湯文武周公の道は仲尼を得て、而して後に明なり。仲尼の所伝に沿て、以て深く数聖人の道に入るに至りては、後人の資となる者は、孟軻氏其の人也なり。西方の教法を以て之れを観れば、則ち遠公は猶お吾が儒の孟子のごとし上已。

又た「結蓮社普勧文」に云く、(5)

我れ今ま諸の有縁を勧めて此の蓮社を結ぶ。縦使知り難く弁べ難くとも猶お当に勉力て精勤なるべし。況んや仏号は甚だ持し易く、浄土は甚だ往き易し。八万四千の法門に是のごときの捷径は無しと上已。

(5) 宗暁『楽邦文類』（正蔵四七・一七九上）に引用文あり。

無量院[6]の「造弥陀像記」に云く[7]芝霊、

弥陀の教観大蔵に載ること、多からずと為せず。然るに仏化東流して数百年の間、世人殆ど知る者無し。晋の慧遠法師廬山東林に居し、[8]神機独抜にして天下の倡たり。池を鑿り蓮を栽え、堂を建て誓を立て専ら浄業を崇む。号して白蓮社と為す。至乃是の故に、後世浄社を言う者は必ず東林を以て始と為す。厥の後、善導・懐感大に長安に闡き、智覚・慈雲盛に淅右に振う。末流狂妄にして、正道梗塞す。或いは名相に束縛せられ、或いは豁達に沈冥す。故に有いは念仏を貶して、麁行と為し浄業を忽せにして、小道と為ること、自蔽を執隅して、盲じて聞く所無し。聞くと雖も信ぜざる。信ずと雖も、修せざる。修すと雖、勤ごろならず。是に於て浄土の教門、或いは幾くか息するや。[9]嗚呼、教観に明らかなることは、孰れか智者のごとくならんや。臨終に『観経』を挙げて、浄土を讃じて長く逝きぬ。法界に達すること孰れか杜順のごとくなるや。四衆を勧めて仏陀[10]を念じて勝相を感じて西邁し

(6) 異本に「量」の後に「寿」の字あり。
(7) 宗暁『楽邦文類』（正蔵四七・一八七上）に引用文あり。
(8) 異本には「之」の字なし。
(9) 異本の訓点に従った。

ぬ。参禅見性[11]すること、孰れか高玉智覚のごとくならん。皆社を結して念仏して、倶に上品に登る。業儒・有才孰れか劉雷・柳子厚・白楽天のごとくなるや。然れども皆筆を秉り誠を書して、彼土に願生す。是を以て之を観ずれば、剛明卓抜の識を負いて生死変化の数に達する者に非ざるより、其れ孰れか能く此れを信ぜんやと已上。

六箇の誠証学者、心を留むべし。曰く、[12]

敢て問う。之れ曰く慧遠大師礼文に葛天氏云く、訳師羅什も亦た欽揚す。仏已に霊山にして先ず授記したまうと已上。

註礼文に曰く、[13]

羅什とは師羅什関に入ると聞き即ち書を遣じて好みて通ず。什答書して云く、経に言く末。後東方に当に護法の菩薩有るべしと。勗めよや。仁者善く其の事を弘めよ已上

七仏訳者の讃美なり。誰か疑を生ずべけんや。諸曰く、敢て問う。答う。薄伽至尊菩提樹下獅子座上に在て、初て浄教の大綱を結して、愛海沈淪の群類を済度す。

上宮法王は豊葦原中国の四天王寺に於て先尊号の利剣を揮て、

(10) 異本には「弥陀」とある。
(11) 異本には「神」とある。
(12) 『夢中松風論』（『続浄』九・一八〇上）に智円が同文を引用している。
(13) 慧皎『高僧伝』（正蔵五〇・三五九中）。

祖王生死の怨讐を降伏す。曰く敢て問う。曰く豈に文選に云ざらんや。流れ長きものは則ち竭き難く、根深きものは則ち朽ち難きと。居の諺に曰く、前鋒は初なれば即ち難く、後騎は次なれば是れ易しと。此れは吾が宗の一陳に列なり、他門の殿後に居することを謂うか。爰に諸宗の贋徒等、沮みて曰く、浄教は宗に非ず。何ぞ恣に高ぶりて自ら一家一宗と称するや。諸小僧之を聞きて訇りて曰く、仁者等何[14]ぞ此のごときの不忍の言を出だすや。何ぞ此のごときの不忍の言を出だすや。此れは是れ。蜩鴳鶯鳩の笑いか。此れは是れ蜩鴳鶯鳩の笑か。仁者知らずや。夫れ宗旨とは教行の昌栄に名だたりということを廬山の十八賢、蓮社の一千人、学ぶに九品真典を以てし、行ずるに三字の尊号を以てす。是れ豈に真宗興隆の濫觴に非ずや。慈恩大師の『西方要決』に云く、[15]

夫れ以れば、生まれて像季に居り聖を去ること斯れ遥なり。道三乗に預れども契悟するに方無し。人天の両位は、躁動にして安からず。智博く情弘きは能く久しく処するに堪えたり。若し識痴に行浅きものは、恐らくは幽塗に溺れなん。必

(14) ルビは異本に従った。
(15) 基『西方要決』（浄全六・六〇五下）。

ず須く跡を娑婆に遠ざけ、神を浄域に棲ましむべし。仰ぎ願くは同縁正しく事身心を敬発して此の一宗に依らば、定んで拒割を為さん。幸わくは心を世利に縈りて窄く非常を懼るること勿れ。声安と遠との風を追うとも奚ぞ電影に殊ならん。徳肇と生との節に過ぐるとも、誰か乾城を謝せん已上。

又た迦才法師の『浄土論』に云く、「故に知んぬ、浄土宗の意は本ち凡夫の為にして、兼ねては聖人の為にせりと」(16)已上。又た曰く、(17)

問うて曰く、浄土の門は凡聖斉しく往く。未だ知らず。宗の意は正しく是れ何れの人ぞや。答えて曰く、乃至、未来世の一切凡夫の煩悩賊の為に害せられたる者の為に清浄業の処を説く已上。

又た曰く、(18)

夫れ浄土の玄門は十方に咸く讃じ、弥陀の宝界は凡聖同じく欣う。然れば則ち、二八の弘規は西土に盛んなり。一九の教えは東夏に淩遅せり、余、毎群典を披閲して詳らかに聖言を

(16) 迦才『浄土論』(浄全六・六四三上)。
(17) 迦才『浄土論』(浄全六・六三七上～下)。
(18) 迦才『浄土論』(浄全六・六二七上)。

撿ぶるに此の一宗、窃に要路為り。其れ之れに達する者は、之れを触みて稽顙し、未だ悟らざる者は矚て躊躇す。若し此れを憑みて神を栖ましめ、終に恐らくは永夜に沈淪せんことを上已。

又た『疏』の第四に云く、「真宗遇い叵く、浄土の要逢い難し。五趣をして斉しく生ぜしめんと欲すと」[19]上已。又た曰く、「玄文に曰く、今此の『観経』は亦た念仏三昧を以て宗と為すと」[20]上已。又た法照国師の曰く、「禅律如何んが是れ正法なる。念仏三昧は是れ真宗なりと」[21]上已。衆文明鑑なり。致迷すること莫れ。又た『四分律鈔批』に曰く、[22]

素律師、戒行を用いて宗と為すと云い、夫れ宗を論ずることは、詮を取りて顕わす所なり。詮、既に戒を顕わす。即ち是れ其の宗なり。故に『婆沙』に曰く、「奈耶(いか)んが戒を詮すと」。又た云く、「宗は是れ族の義、尊の義、崇の義、重の義なり。此の教の始終、戒行を尊崇す。故に戒行を用いて以て宗体と為す。『法華』の如きには、一乗を詮す。即ち一乗を用いて

(19) 善導『観経疏』(浄全二・七二上)。
(20) 善導『観経疏』(浄全二・三下)。
(21) 法照『五会法事讃』(浄全六・六八二下)。
(22) 大覚『四分律行事鈔批』(『卍続』四二)全体の取意か。

宗と為す。『涅槃』には仏性を詮す。還た仏性を以て宗と為す。

此れは既に戒を詮す。如何ぞ宗に非ざらんやと已上。

今、彼に準じて之れを言わば、三部の妙典は持名の一行を詮す。胡んぞ、宗に非ざらんや。抑又た宗宗の沙門、一人を敬せずして不敬王者の篇唯だ三宝の境界に服事し、面面の祖師、生を九蓮に托して、速かに二死の険難を超越することは、是れ正しく廬山大士の洪恩より生ぜり廬山本記。夫れ渺漫たる徳海、日日に之れに浴して其の深きことを報ぜず。峻嶷たる恩山、夜夜に之れ戴きて其の重きことを思わずんば、是れ則ち飛禽の樹を悪み、潜魚の水を猒うの謂いか。孔老倶に恩を知らざるの人を炳誡し、孟墨同じく徳を謝せざるの彙い禁遏ずるの者なり。何に矧んや、釈氏氏大我の教令に於てをや。然れば則ち菩提樹下には尊重の師友の尸羅を結び、寒林城中には奉事師長の礼節を示したまえり。曰く、敢えて問う。答う。『華厳』に曰く、「恩を知らざる者は多く横死に遭えりと」[23]已上。又た当来の果報、其れ如何ん。

問うて曰く、真宗建立の方、如何ん。

答えて曰く、慧遠大師云く、「諸の三昧、其の名、甚だ衆(おお)けれども、功高くして進み易きは念仏を先と為すと」[24]已上。是れ其の浄宗廃立の義相なり。例せば、天台は『法華』を以て一代に卓犖すと為す。慈恩は唯識を以て衆典に超絶せりと為るが如し。遠公、爾前には未だ経論の権実を定め、時教の殿最を判ずること有らず。有識の智人、省察せよ。有識の智人、省察せよ。

難じて云く、何ぞ教行の繁広を以て自ら高ぶりて浄土真宗の訇しるや。

答えて曰く、此れは是れ何と言うぞや。此れは是れ何と言うぞや。弾指一笑。弾指一笑。凡そ経毎に宗旨を説き、論毎に宗義を判ず。南北の諸師、亦た経論に依りて解脱の捷径を詳勘する。是れ名づけて宗と為なり。廬山已に鷲峰所説の大経に依りて以て大いに安養浄土の要門を開く。若し之れを宗旨と名づけずんば、是れ何物ぞや。如何ん。諸宗皆な斯の如し。心を留めて自量せよ。

曰く敢えて問う。之れ曰く、天台宗とは、後進、円宗伝持の山に従って宗名を立てたり。華厳、三論は所依の経論に従って宗の

(23) 實叉難陀訳『華厳経』（正蔵一〇・二五六中）。

(24) 出典未詳、宗暁『楽邦文類』（浄全六・九五八上）に同文有り。

名を得たり。真言、仏心宗は所行の法門に約して名を立つ。法相宗は所談の法義に従って名を立つ。地持、摂論、倶舎、成実、律宗等の諸宗は皆な所依の本文に約して、以て名を得たり。今は吾が門に宗号を立するに即ち其の二有り。所謂る若し所行の妙法に約して以て之れを明かさば、当に念仏宗と称すべし。若し所生の器界に約して以て之れを論ぜば、応に浄土宗と号すべし。又た浄教は是れ真実究竟最上大乗の頓法なり。故に真宗と名づくるのみ。卓抜の学者、知んぬべし。

敢えて問う。之れ答う。彼は弥陀覚王の霊徳に約して以て語うことを為す。今は牟尼至尊の遺教に就いて以て言うことを為す。先後、各其(おのおの)の一を談じて違すること無し。夫れ如来、未だ去したまわざるの時、逝多林中給孤独園に在して普く八部の大衆に語りて曰く、一切有為の法は夢と幻と泡と影との如し。露の如く、亦た電の如し。応に是の如きの観を作すべしと。南無阿弥陀仏。

夫れ以みば菩提樹下には十種大願の誠文有り。居鷲峰山中には五障即詣の授記を賜う。諸荊渓尊者判じて「諸教所讃多在弥陀」[25]と云える、是れなり。始説終談、同じく西方を謂う。寔こに以え有るかな。何かなる所以ぞや。弥陀の別願なるが故に、済凡の秘術なるが故に。原以るに臣は君王の詔を守り、子は厳父の命に順う。江南淮北の諸賢、皆な勧乎西刹の欣求を勧め、河西河東の群英、悉く東隅の猷離を悔ゆ。然りと雖も三学分内の已見に局られて、窃窃然として未だ六八超世の玄極を弁えず。自力難行の閫域に迂廻して、芒芒焉として猶お他力格外の捷径に迷えり。古に曰く、知一官に効る。行一郷に比い、徳一君に合し、一国を徴する者は其の自ら視ることなり。亦た此の若しと。此れは顕密の諸宗に於いて、各(おのおの)、一途に長るの人、別願の深邃を悟らざるを謂うか。

問うて云く、言う所は何ぞや。

答えて曰く、天台国師は五逆摂取の文を判じて「此経明観故説得生」[26]と云い、浄影大師は三品下輩の位を定めて「一万却行善趣位中」[27]と宣べたり。是れ其の義相なり。此れは是れ他氏詳勘の卒

(25) 湛然『止観輔行伝弘決』（正蔵四六・一八二下）。

略、余哲看閲の不審なり。如何が不審なるや。夫れ意みれば、不遑念仏転教口称の愚人なり。豈に止観明静の妙行を提撕すべけんや。夫れ十悪五逆具諸不善之の痴類なり。孰んぞ十信万劫の菩薩なりと定めんや。古徳、傷嗟して曰く「弘通西教の祖師、多しと雖も各自宗に会して皆な願意を隠す」[28]と。蓋し此の謂いか。爰こに吾宗の高祖京師尊者、古今の釈義を揩定して叮嚀に本発重誓願の邃窟を索ぐり、慇懃に深広無涯底の願海を釣りて、逞しく激揚して「一切善悪凡夫得生者莫不皆乗阿弥陀仏大願業力為増上縁」[29]と云いたまえり。這箇語、超世大願の至理を極む。其の文、絶だ奇なり。其の意、又た奥妙なり。宗家より前、未だ个の言有らず。京師より後も亦た未だ此の評有らず。

謂いつべし。千百年独到の高判なりと。誰れの智人か之れを読みて、壅滞を決らざらんや。孰れの学者か、之れを看て漆桶を破らざらんや。夫れ就中く、持名妙行の決定即詣の直因なるの由を詳勘して、[30]

一心に専ら弥陀名号を念じて念念に捨てざる者、是れを正定

(26) 智顗『観経疏』（正蔵三七・一九三下）。
(27) 慧遠『観経義疏』（正蔵三七・一八四下）。
(28) 出典不明。
(29) 善導『観経疏』（浄全二・二上）。
(30) 善導『観経疏』（浄全二・五八下）。

の業と名づく。彼の仏の願に順ずるが故に。

と云い、又た聞経称仏の功徳の雌雄を明かすとして、然るに、[31]

仏の願意に望むれば唯だ正念に名を称することを勧む。往生の義、疾きこと雑散の業に同じからず。此の経及び諸部の中の如き、処処に広く歎じて勧めて名を称せしむるを将て要益と為す。

と釈す。這の二箇の評判、殊に戒定薫修の沈麝を謟わずして、独り別意弘願の檀林を賞翫する者をや。夫れ大師の高文好処、極めて多し。此の両三の明言の如きは、又た妙中の妙なる者なり。五部の書中に此れを第一の要処と為す。是れ則ち天機秀発の解釈なり。亦た従藍而青の別徳に非ずや。花中の芬陀利なり。金中の閻浮金なり。特だ一家九軸の書中のみに非ず。古今の作者を合して之れを求むるに亦た此の如きの憲章無し。若し学仏の漢、読み得て透徹せば自ら無窮の滋味有らんか。四輩、指を染めよ。四輩、指を染めよ。

古に曰く、[32]

(31) 善導『観経疏』（浄全二・六八上）。
(32) 法然『選択集』（昭法全三四九）。

謂いつべし。此の疏は是れ弥陀の伝説なり。何に況んや、大唐に相伝して云く、善導は是れ弥陀の化身なり、と。爾らば謂いつべし。又た此の文は是れ弥陀の直説なり、と。仰ぎて本地を討ぬれば、四十八願の法王なり。十劫正覚の唱え、念仏に憑み有り。俯して垂迹を訪えば、専修念仏の導師なり。三昧正受の語、往生に疑い無し。本迹、異なりと雖も化導は是れ一なり。於是に貧道の昔、茲の典を披閲して粗素意を識とる。立ちどころに余行を舎てて、云に念仏に帰す、と。

誠なるかな、斯の言、夫れ吾が大師は久遠に成道して、本迹倶に高し。普く一切に師として広く群品を済い、覚王を輔佐して、経を堅くし、緯を精しくして、錦上に華を添え、行中に信を増すのみ。大凡そ歴古より以降た易行捷径を示すの司南、惟れ多し。善く別願海の源底を窮徹して、妙に弥陀教の壷邃を捜索するに至りては、一如経法の真典に出でたるは無し。言約にして、義豊かに旨深くして、詞雅びなり。所以に安遠に卓犖し、鸞綽に逾邁して大法将為り。真身、世に住すとも是れに如かずとは、豈に虚然

ならんや。若し学者有りて、斯の高判を鑑みれば、縦い掩耳(えんじ)の智と雖も剖割を待たず。嗚呼、宜べなるかな、此の典は是れ真宝鏡の如し。法理を照らすこと尽として遺すこと無し。亦た摩尼珠の如く、宝を雨ふらして貧窮の者を済う。亦た清涼池の如く、諸の熱悩を澡浴す。亦た無畏術の如く、邪毒の害を消伏す。亦た究竟伴の如く、能く険難の道を過ぐ。亦た甘露門の如く、衆聖の遊ぶ所なり。亦た金剛宝の如く、能く外難の軍を摧く。亦た良薬の如く、能く不信の病を愈す。亦た民の王を得んが如く、能く善悪是非を評判す。亦た裸者の嬰孩、好衣慈母を得たるが如く、能く飢寒の苦を除く。此の如くの霊徳、端(きざ)し多し。毛挙に遑あらず。若し人、此の典を看得して、子細に検点し、承諾頷許して這(こ)の入処を得れば、縦使い大師、復た生ずるとも、亦た必ず汝に一隻眼を具せることを還さんと道(い)わん。凡そ此等の明文に依りて、匪石の信心を堅固にするの彙いは、十即十生し、百即百生す。誰れの道人か之れを尊重し珍敬せざらんや。往生の得否は只だ斯の文に在る者なり。云云

夫れ黒谷の尊師は、一代八万の法蔵を開くの鍵鑰、八宗九宗の清流を渉るの竜象なり。然りと雖も、順彼仏願故の解釈を見得して、能く滋味を嘗め、暗夜に灯炬を得るが如くして、二死の大夜を照らし、河海に船舶に値たえるが如くして、八苦の愛海を渡る。又た意気雄俊にして言弁縦横し、故に来問を辞せずして、機に応じて以て対答し、賢愚を択ばずして、法を説きて以て摂化したもう者なり。是れ併わせて証定の疏を以て爺嬢と為して慧解を生ずる所以なり。

夫れ光明、黒谷の両傑は、是れ弥陀悲母の応現なり。勢至慈尊の降誕なり。故に慈雲広く覆い、悲雨普く灑ぐ。若し厄難の衆生を視れば、匍匐して以て之れを救済し、立撮して以て之れを汲引す。抑亦た御書の佳名有ることは、是れ君臣同じく之れを敬い、皁白倶に之れを尊ぶ故か。

問うて曰く、言う所は何ぞや。

答えて曰く、御の字は唯だ天子の所為(わざ)に局れり。然るに宗家の製述に於ては独り御書と呼ぶことを得たり。是れ衆典の上の又た

一層級なり。

曰く敢えて問う。曰く、顕徳天皇の御記に曰く、[33]

善導和尚の御書を見るに曰く、「身を知れば仮りに合して四大共に成じ、命を識れば浮危にして、譬えば厳霜の日に対えるに似たり。恐畏らくは、命は石火の照らすこと、期し難きに同じ。識性無常にして逝くこと風燭に踰えたり。故に人人同じく願じて共に往生の業を結すべしといえり」。予、此の視誨に依りて草露の命を堅からざることを猒い、黄金の台の登り易きことを欣う云云と。

又た寛元皇帝は道観上人を召して、常に浄教の遊を為したまえり。常の仰せに曰く、「京師和尚の九軸の御書は具縛の凡夫、出離の勝縁なり」云云[34]と。

又た文応皇帝は道教、了観の二哲に交じりて殊に大師垂範して清談したもう。其の綸言に曰く、「夫れ光明和尚の四冊の御書は我等凡夫の依学の秘典なり」云云[35]と。

又た正応皇帝、永仁皇帝同じく如一上人を召して、以て御師範

(33) 出典未詳。後に珂然『義山和尚行業記並要解』（浄全一八・一〇六下）にも引用されている。

(34) 出典未詳。後に珂然『義山和尚行業記並要解』（浄全一八・一〇七上）にも引用されている。

と為して多載一家の解釈を稟習し、常の仰せに曰く、「五部の御書は文約にして義豊かなり」[36]云云と。

又た文治の摂録 月輪殿 は、黒谷尊師に随いて光明の踪躅を尋ねたもう。然るに法門談論の刻に示して曰く、「京師八軸の御書は弘願信楽の媒介なり」[37]云云と。

此の以外、南北諸宗の高僧、竹園槐門の縉紳等、宗家の製述を呼ぶ毎に皆な御書と称せずということ莫れ。

抑小僧、特に浄教を伝受するのみに匪ず。亦た兼ねて台宗を稟承する。茲に因りて両宗の学者、常に来学せり。爰に戸を扣きて浄土宗を来問する人の言を聞けば、皆な御書九帖とのみ云い、又た室に入りて円頓教を諮詢する彙の語を聴くに、悉く大部章疏とのみ云えり。其の故何ぞや。是れ併しながら光明大師の御作を尊重し珍敬する所以なり。若し个の義辺に就きて之れを言えば、這の一章をば亦た御書通呼勝とも名づくべきか。夫れ噫乎痛いかな。尭舜禹湯の大聖為るや。猶お法王の政途には闇し。項藉悪来が力士為るや。未だ獄中の鬼卒を撃たず。夫れ鈍刀、骨を切るは

(35) 出典未詳。後に珂然『義山和尚行業記並要解』(浄全一八・一〇七上)にも引用されている。

(36) 出典未詳。後に珂然『義山和尚行業記並要解』(浄全一八・一〇七上)にも引用されている。

(37) 出典未詳。後に珂然『義山和尚行業記並要解』(浄全一八・一〇七上)にも引用されている。

必ず砥の助けに由る。重輅の軽く走るは抑、亦た油の縁なり。無智の鉄木、猶お既に此の如し。有情の人類、尊号を持ちて蓋ぞ生死の鉄牢を出づることを得ざらんや。南無阿弥陀仏。

## 該教行益勝 第九

夫れ言い言うて解らざるは是れ鸚鵡か。解し解して行わざるは乃ち猩猩か。当代の聖道自力の学徒、其れ然らざらんや。凡そ経論釈義の載する所を見るに、当今末法の中には只だ教学のみ有りて全く行証無しといえり。今試みに史冊を披きて僧徳を勘うれば、多く学教修行を記すれども、断惑証理を録すること鮮なし。

但だし慧文は銅輪に透徹し、南岳は似位に悟入せし等は、是れ大海の一滴か。亦た九牛が一毛か。就中本朝緇輩の行迹を視聴するに、三百載より以往のかた習学の者は牛毛の若くなれども、妙解する者は麟角よりも稀なり。儘解了することを聴けども、妙行を立つるの彙、鳳觜よりも少なく、曇華よりも希なり。若し爾らば、胡んぞ五略具足の円人と名づけんや。亦た六位周備の行者と

号せんや。

今、小愚、難行の疲夫に問て云く、夫れ自力難行の諸道には教行のみ有りて証益無しと雖も、之れを以て足りぬと為るや、否や。

答えて曰く、不なり。若し爾らば、其の期する所、如何。設し教学のみ有りて行証無くんば、那の所詮か有らん。夫れ豈に彼の朱泙漫が竜を屠ることを支離益に学び、寿陵余子の行歩を邯鄲に習いしに異ならんや。

曰く、敢えて問う。曰く、『荘子』第十に曰く、(38)

朱泙漫、竜を屠ること支離益に学ぶ。千金の家を単し、三年にして技成りて、其の巧を用うる所無し已上と。

『註』希逸に曰く、(39)

単は殫なり。言うこころは其の千金の資を竭す。学成ると雖も竜の屠るべき無し。此の意は蓋し自ら荘子の道の広大にして未だ施す所有らざるに喩う已上。

又た『荘子』第六に曰く、(40)

且子、独り夫の寿陵の余子が行を邯鄲に学ぶを聞く。未だ国能を

(38)『荘子』雑篇　列御寇。
(39)『荘子注』、出典未詳。

得ず。又た其の故行を失す。直ちに匍匐して帰るのみ已上と。

『註』に曰く、[41]

邯鄲に行を失うの喩、尤も佳なり。国能は邯鄲の国中に能する所の歩なり。学未だ成らずして、故歩又た失す。所以に匍匐して帰る已上と。

玄英『荘子疏』に曰く、「時、昏乱に逢うが故に、聖道行われず」[42] 已上と。

倩(つらつら)以れば、当今末法の聖道諸宗の教学は、是れ朱泙漫(しゅひょうまん)か。亦た寿陵余子か。若し行証無くんば、多載辛苦の受業、皆な徒設と為らんを笑うべし。屠竜の学、憫むべし。邯鄲の歩か。然るに浄土一門の教益に於いては、下智と高才とを簡ばざるが故に、末代の愚鈍をも捨てず、破戒と罪根の深きとを簡ばざるが故に、逆謗犯重をも摂取す。

然れば則ち教といい行といい益といい、三法具さに該(そ)なう。宛かも伊字の三点、面上の三目の如く、相い似て相捨離せず。遥かに六万歳の時に至れるが故に、大いに夫の聖道の教行証の三時代

(40)『荘子』外篇　秋水。
(41)『荘子注』、出典未詳。
(42)玄英『荘子疏』、出典未詳。

謝するには異なるなり。凡そ教学を致すことは、正しく是れ正行を立てんが為なり。正行を立つることは、亦た即ち証益を得んが為なり。

若し証益無くんば、正行是れ徒らに設くるならん。正行徒らに設くるならば、又た教学何の詮か有りや。鼎の三足具闕其れ如之何。学者商量せよ。学者商量せよ。

荘子之の言を聞けば、譬えば今日方に始めて越に適きて、昔日已に至ると謂うが如し。天下に寧ろ是の理有らんや。此れは当代聖道の行者、各匂いて我れ自ら能く二死の疾瘵を除きて、以て三藐の平身を得たりと言わんことを謂う。当今末法の時に顕密諸宗の学者等、未だ五位を経歴せずして、多く未得謂得、未証謂証の上慢を懐けり。是れ則ち太早（はやたや）の贋徒なり。譬えば卵を見て時夜を求め、弾を見て鴞炙（きょうしゃ）を求むるが如し。実に笑懼（しょうく）すべき者か。

抑（そもそも）一切衆生等、戒手繚戻して煩悩の賊を捉うることを得ず。定索細弱にして縛惑障怨を縛ることを得ず。慧剣刃鈍くして、結使の首を断ずることを得ず。然れば則ち惑業の大賊、甚だ荒乱し

て功徳の聖財を劫奪し訖んぬ。然るときは則ち貧窮にして福慧無し。福田乾けるか故に、此の岸を去らんと欲する者も去らず。但し清浄の白業は如来長者の給与したまう所なり。泥裏の真金は、五住怨賊の伺わざる所なり。行者怯弱の心を生ぜず、一心に六字の尊号を唱うべし。夫れ於戯(ああ)、貴いかな、宜(うべ)なるかな。名号摩尼宝の光、赫赫として能く法灯磨滅の時を照し、念仏栴檀香の熏(にお)い郁郁として、速かに逆謗伊蘭の林に馥(かんば)し。這の巨益は、是れ諸仏の善巧の能く及ぶ所に非ず。箇の良談は是れ自力外道の能く識る所に匪ず。有道の仁、斟酌せよ。

夫れ暴強の者も、終に衰滅の期を見るか。長命の彙も必ず終没の日有り。古に曰く、強呉滅びて荊棘有り。姑蘇台の露、瀼瀼たり。暴秦衰えて虎狼無し。咸陽宮の煙、片片(へんへん)たり。嗚呼、朝露よりも危脆なるは、是れ有待の依身なり。夕煙よりも須臾なるは、迺ち無頼の形骸なり。夫れ名号栴檀の馥いは、円生百由旬の芬郁にも勝り、王母三千里の熏芳にも超えたり。誰か之を愛玩せざらん者か。南無阿弥陀仏。

## 超絶師範勝 第十

夫れ達池の徳水は四河に分かれて八功を失し、雪山の甘薬は澆季に属して六味に変ず。抑釈迦老子の恵日、娑羅林に隠れたまいし以往(このかた)、一百祀の内外に不解生滅法の一句、悞て不見水老鶴の雑語と為りて自り、忝くも結集の慶喜、智慧衰少言多錯謬の欺きを得たまえり。是れ則ち三時代謝し、法験衰微せる故なり。

今倩、諸教の師資相承の次第を案ずるに、且らく法相宗の承継の次第の如きは、慈氏は補処の大士、無著は初地の菩薩、世親は向満の薩埵なり。又た且だ法相宗のみに匪ず。四家法性宗の師弟の深浅、亦復た斯の如し。且らく三論宗の師資の次第の如くんば、文殊は等覚の大聖、馬鳴は八地の索多、竜樹は初地の聖人なり。又た天台円宗の祖承の如くんば、慧文は銅輪の真位、南岳は鐵輪の内凡、天台は五品の外凡なり。是れ亦た代下り、行浅の致す所なり。

吾が宗紹は然らず。夫れ巨唐の高祖光明尊者は、遠くは西方の

教主為り、近くは支那の能化為り。大いに三摩鉢提を開発して、正しく師長綽公を激励す。又た本朝の始祖然公尊師は一代八万の釈典を通利し、五相三諦の玄旨を究極す。茲に因りて黒谷の本師は推して軌範と為し、本国の闍梨は還りて弟子と為る。静かに以れば、劉氏の天下に王として遥かに二百余載を経ることは、是れ文帝の倹約、漢高に勝れたる故なり。李氏の四海に主として久しく二十二世を治することは、迺ち大宗の徳化、神尭に超えたる故なり。今此の浄教の末代澆季に於て八極に繁栄し、法滅百歳に至りて四瀆に流行することは、是れ併ら光明大師は綽公禅師に逹躒し、黒谷尊師は叡公和尚に超過したまえる故か。此の義、他門に於て無き所なり。此の旨、余宗に於て絶えたる所なり。尤も奇異とするに足れり。

曰く、敢えて問う。曰く『選択集』に曰く、[43]

問うて曰く、道綽禅師は是れ善導和尚の師なり。抑又た浄土の祖師なり。何ぞ之れを用いざるや。

答えて曰く、道綽禅師は是れ師なりと雖も未だ三昧を発せ

(43) 法然『選択集』（昭法全三四八～三四九）。

ず。故に自ら往生の得否を知らず。

善導に問うて曰く、道綽、念仏す。往生を得るや否や。

導、一茎の蓮花を弁じて之れを仏前に置かしめて行道七日せんに、萎悴せずんば即ち往生を得んと。之れに依りて七日するに果然として華萎黄せず。

綽、其の深詣を歎ず。因みに入定して生ずることを得べきや否やを観ぜんことを請う。

導、即ち定に入りて須臾に報じて曰く、師、当に三罪を懺して方に往生すべし。一には、師、嘗つて仏の尊像を安じて檐牖の下に在りき、自らは深房に処れり。二には、出家の人を駆使し策役す。三には屋宇を営造して虫命を損傷す。師、宜しく十方仏の前に於て第一の罪を懺し、四方僧の前に於て第二の罪を懺し、一切衆生の前に於て第三の罪を懺ずべしと。

綽公、静かに往咎を思うに、皆な曰うこと虚しからず。是に於て洗心悔謝し訖りて導に見るに即ち曰く、師の罪滅しぬ。後ち当に白光有りて照燭すべし。是れ師の往生の相なり『新修』已上。

往生伝』、と。

爰に知んぬ。善導和尚は、行、三昧を発して、力、師位に堪えたり。解行、凡に非ざること、将に是れ暁らけし。況んや又た、時の人の諺に曰く、仏法東行してより已来、未だ禅師のごとき盛徳は有らず。絶倫の誉れ、得て称すべからざる者か。加之のみならず、『観経』の文義を條録するの刻に頗る霊瑞を感じ、屢聖化に預かり、既に聖の冥加を蒙りて、然して経の科文を造る。世、挙げて、証定の疏と称し、人、之れを貴ぶこと仏の経法の如し。即ち彼の『疏』の第四巻の奥に曰く、「乃至此の義、已に証を請いて定め竟んぬ。一句一字も加減すべからず。写さんと欲する者は、一ら経法の如くせよ。応に知るべし」已上。

静かに以れば、善導の『観経の疏』は是れ西方の指南、行者の目足なり。然れば則ち、西方の行人、必ず須らく珍敬すべし。就中、毎夜夢中に僧有りて玄義を指授す。僧は恐らくは是れ弥陀の応現ならん。爾らば謂いつべし。此の『疏』は是

れ弥陀の伝説なり、と。何に況んや、大唐相い伝えて云く、善導は是れ弥陀の化身なり、と。爾らば謂いつべし。又た此の文は是れ弥陀の直説なり、と。既に写さんと欲さん者は一ら経法の如くせよ、と。此の言、誠なるか。仰いで本地を討ぬれば、四十八願の法王なり。十劫正覚の唱え、念仏に憑み有り。俯して垂迹を訪えば、専修念仏の導師なり。三昧正受の語は往生に疑い無し。本迹異なりと雖も化導是れ一なり上已と。

抑高祖大師、毫を揮い、翰を染めて教相を排列して両道の難易を区別し、二行の助正を的示す。其の義、坦坦然たり。厥の旨、明明然たり。尤も依承すべきに足れり。専ら奉行すべきに足れり。於、宜べなるかな、貴いかな。吾が宗の吾が宗為る、是れ孰か力ぞや。只だ光明の草創より起これり。我が門の我が門為る、亦た誰か徳ぞや。正しく黒谷の守文より生れる者か。

曰く、敢えて問う。曰く、綽公禅師は啻だに奢摩他を発得せざるのみに匪ず。又た其の解釈を看るに尚お自心策励の閫域に廻

る。然れば則ち、造罪の者、西方に詣でるの由を詳勘すとして、在心、在縁、在決定と云いて、未だ如来、因地の本誓を募らず。光明尊者は罪悪の彙い東隅の隅を離るの故を評判すとして、然るに仏願の意に望むれば、唯だ勧めて正念に名を称うれば、往生の義、疾きこと雑散の業に同じからずと釈して、底極厮下の凡夫、高妙の安養に往生することは是れ乃ち一向に法蔵索多の大悲本願の力なりと把定せり[一]是。

又た綽公は念観の二行を混濫して助正の不同を弁[の]べず。宗師は観仏を以て助行と為し、念仏を以て正業と為したまえり[二]是。此の例、一に非ず。凡そ両師の解釈、優劣高卑、学者自ら商量せよ。

曰く、敢えて問う。曰く、夫れ然公上人は上乗の尸羅に就いて性無作仮色の義を立て、『要集』の激揚に就いて称名為正の旨を成ず。此の所立、甚だ深微なるが故に、本師、叡公和尚、忽ちに良忍上人に値いて相承する所の心法戒体の義、并びに観法為正の伝を改めて空公上人の所立を仰頼したまえり。

古に言く、[44]「青は藍より出でて、藍より青し。氷は水之れを為

(44)『荀子』勧学。

して水より寒きがなり」と。是れ則ち吾が光明尊者、吾が黒谷尊師の謂いか。両英、徳高し。故に四輩、皆な化に従う。孰か之れを崇重せざらんや。

問うて云く、夫れ智者大師は遠くは竜樹尊者に勝れ、近くは慧文南岳に超ゆ。且らく『摩訶止観』の第一に云く[45]「止観の明静なること前代に未だ聞かず」[已上]と。章安大師、已に智者尊者の所説の『摩訶止観』を指して「前代未聞」と云えり。測り知んぬ、文思の両哲も未だ円頓止観を説きたまわずということを。又た『仏祖統紀』に云く、[46]

吾が仏、出世して諸経を説きたまうと雖も、本懐暢ぶることを得たるは唯だ法華に在り。阿難、結集して自り後、天親、論を作りて経を通すと曰うと雖も、然も文約(つづまや)かにして義を申べて、其の大略を挙ぐるのみ。斯の経の大事、教化の始終に至りては、則ち晦(くら)うして未だ明らかならず。羅什翻訳して東のかた此の土に伝うるに曁(およ)びて疏を造りて消釈する者、異論、一に非ず。唯だ我が智者のみ霊山に親り承け、大蘇に証

(45) 智顗『摩訶止観』（正蔵四六・一上）。
(46) 志磐『仏祖統紀』（正蔵四九・一八六上～中）。

悟して妙旨を発揮し、上乗を幽賛して五義を以て経題を釈し、四尺をもて文句を消し、又た能く十章を以て明静の法門を宣演したまう。於是(ここ)に解行倶に陳べ、義観兼ねて挙ぐ。謂いつべし、行人の心鏡、巨夜の明灯なりと。天竺の大論なりと雖も、尚お其の類に非ず。豈に震旦の人師の能く跂(つまだ)て及ぶ所ならんや云云。

又た問いを設けて曰く、『輔行』に九師の相承を引きて「北斉以前は今の所承に非ず」と謂う。且らく北斉、既に覚心重観三昧を用ゆ。今此に何が故ぞ覚覓但是一轍なりと斥えるや。将た智者、北斉を斥うに非ずや。

答う。妙玄に法華の十妙を開演して尚お「『中論』を以て相い比ぶること莫かれ」と云い、又た天竺の大論、尚お其の類に非ずと。蓋し、智者、如来の意を用いて法華の妙を明かす。故に竜樹、北斉、亦た及ばざる所なり。無生の宗旨、三観法門の若きは其の実には竜樹を祖とし北斉を宗として南岳に稟く。師資相承すること宛かも宿契の如し上已と。

此等の精簡を案ずるに、天台は天親・竜樹に卓犖(たくらく)し、智者は慧文・南岳に超絶すること分明なる者か。若し爾らば、何ぞ超過師範の義、唯だ浄土の一家のみに在りと云わんや。

答えて曰く、円伏五住の智者の解行、円断無明分真の証位に及ぶべからず。観行五品外凡の智慧、相似鐵輪内凡の観智に等しかるべからず。但だし天竺の大論、尚お其の類も非ずと言わば、只だ是れ法華を詳判することの広博なるに就きて、以て言うことを為すのみ。凡そ四教・三観は、本と竜樹の論説に出づ。若し実に智者、竜猛に勝れば能依・所依忽ちに違翻し、外凡・聖位速かに下上すべき者をや。

夫れ天台大師、位、五品に居ることは、是れ正しく大師の自称なり。又た章安の所判なり。加之のみならず、青史諸伝の文、亦た分明なり。誰か爾らずと云わんや。

次に「止観明静前代未聞」の解釈に至りては、大いに所難の趣には異なるなり。今、当に委しく此の旨を評判すべし。謂く、釈典、漢土に来たりしより以降(このかた)、定慧の二法を説くの人、一天に溢

れたりと雖も未だ明静の法義を示さず。只だ是れ我が祖、恵文禅師、竜樹に依りて三観を説きし従り以後、始めて天下に盛んなり。

『摩訶止観』の第一に曰く、[47]

此の止観は天台の智者、己心中の所行の法門を説きたまえるなり。至乃智者は南岳に師とし事う。南岳の徳行、思議すべからず。至乃南岳は恵文禅師に事えたまえり。斉高の世に当たって河淮に独歩せり。法門、世の知る所に非ず。地を履み、天を戴いて高く厚きことを知ること莫し。文師の用心、一ら釈論に依れり。論は是れ竜樹の所説、付法蔵の中の第十三の師なり。智者の『観心論』に云く「帰命竜樹師」と。験らかに知んぬ、竜樹は是れ高祖の師なり。至乃天台は南岳の三種の止観を伝えたまえり已上。

『輔行』の第一に云く[48]「前代未聞」とは、斯の言、在ましける故有り。南山嘆じて云く、唯だ衡岳台厓、双じて禅恵を弘むと。豈に南山諂附して虚しく授けんや已上と。

静かに此等の解釈を案ずるに、明静止観の法要は是れ、竜文思

(47) 智顗『摩訶止観』（正蔵四六・一中～下）。

(48) 湛然『止観輔行伝弘決』（正蔵四六・一四二中）。

智相承の秘跡なりと見えたり。若爾らば、前代未聞の言は専ら、他師の不説を指すなるべし。抑も竜樹南岳全く不法文を天台に諮わず。天台大師更に法要を竜樹南岳に授けず。南岳大師正しく、智者の道を印証したまえり。且つ『仏祖統紀』に天台大師の得旋陀羅尼の相を明かして云わく、(49)

昏暁に苦到教うる如くに心を研ぐ。柏を切りて香に代え、柏尽ればこれに継ぐに、栗を以て簾を巻くりて月を進め、月没すればこれを燎すに松を以て二七日を経て、経を誦して是真精進是名真法供養如来というに至りて、身心豁然として、寂として定に入る。持は静に因みて発す（妙楽の云わく、円門の三昧と陀羅尼と体同じうして、名異なり。三昧は定に従い、陀羅尼は慧に従う。静とは定なり。即ち法華の前方便なり。持とは空持なり。初めの旋陀羅尼なり）法華を照了すること若し高暉の幽谷に臨めるが如し。日の正午なり。諸法相に達すること、長風の太虚に遊ぶが如し。証を将て師に白す。南岳更に為めに開演す。（凡そ自心の悟る所及び師に従いて咨受す。四夜に進を加う。功百年に逾たり。南岳歎じて曰わく、汝に非は証せず。我に非は、識所無けん。入の定は法華三昧の前方便なり。所発の持は旋陀羅尼なり。凡已そ登住を真修と為し、十信を方便と為す。今前と言うは正しく五品を指すとなり上）

今此の詳勘を案ずるに、智者尊者は南岳の印証を被りて、初め

(49) 志磐『仏祖統紀』（正蔵四九・一八一中）。

て所悟の深浅を知り、武津禅師は天台の内証を示して、専ら師資の次第を成ず。然るに綽公禅師は、往生の得否を京師和尚に問い、光明大師は三罪懺摩を玄中尊者に示したまえり。又た叡公上人は尸羅称名の義を空公尊師に尋ね、然公上人は戒体称正の旨を黒谷本師に授く。然れば則ち、彼に類してこれを沮むこと勿れ。此を挙げて彼に同ずること勿れ。但し莫以中論相比とは、且らく判教の広多なるに就いて以て言うことを為し、是れ即ち至天台来分別始盛の意なり。学者静かに商量すべし。曰わく敢えて問う。曰わく『新修伝』に曰く、(50)

釈の善導、何れの許の人ということを悉にせず。寰宇に周遊して、道津を求訪す。唐の貞観中に、西河綽禅師の方等懺を行じ、及び浄土の九品道場にして『観経』を講ずるを見て導大いに喜びて曰わく、此れ真に仏道に入るの津要なり。余の行業修するは、迂僻にして成じ難し。惟(つらつら)此の観門のみ速かに生死を超えん。吾れこれを得たり已上と。

又た『続高僧伝』に曰く、(51)

(50) 戒珠『浄土往生伝』（正蔵五一・一一九上）。
(51) 道宣『続高僧伝』（正蔵五〇・六八四上）。

近ごろ山僧善導という者有り。周く寰宇に遊んで道津を求訪す。行きて西河に至りて道綽師の唯念仏弥陀の浄業を行ずるに遇いて、既に京師に入りて広く此の化を行ずと已。

綽導師資の義青史の露点鮮潔なり。学者疑いを生ずること勿れ。抑今余而に語らう。夫れ利見の本は、必らず導空の間に生れり。其の末、万世の後に存ず。万世の後も其れ必らず三学分外の愚彙を度すること有らんのみ。夫れ倩以れば人知人の鑑有る者、鮮し。若し知人の明鑑有りとも、至徳の要道を知る者益鮮し。漢の蕭何は善く知人の鑑有らんかとも、未だ皇化の道を知らず。故に天子に向かいて、覇事を説く。人貴く行卑しきが故に、漢の世二百祀を踰ず。劉徳夏商周に逮わざるは、是れ則ち何公が道を知らざるの致す所なり。然るに今、我が曩聖の善く知人の鑒有りて、亦た玄極の道を知る。然れば則ち天子の為には、万機の政を説き、諸候の為には一国の事を示す。所以に其の道徳遠く千年の後に通ず。其の法潤普く十歳の飢を沾す。凡そ他氏の知識と吾師の霊徳と日を同じくして謂うべからざるものか。嗚呼悲しい

かな。夫の殷の蜚廉が善く走りしも、阿防追て去るときは、則ち逋け走ること能わず。漢樊噲が能く戦しも、獄卒呵責するときは、則ち手を束ねて降を請う。

『大般若』に曰く、(52)

善男善女一たび南無仏陀と称うるに至る。是の善男女は生死の際を窮めて、善根尽くること無し。乃至最後に般涅槃を得んと已上。

南無阿弥陀仏。

## 自解他宗勝 第十一

夫れ古に云く、生まれながらに知る者は之れ上なり。学びて而も知るは次に良しと。爰に吾が祖黒谷の然公上人は、器宇淵邃・神性敏悟・慧解天縦にして殆んど師長の授与に超ゆ。智弁不器にして妙に他宗の深義を解す。自解旨に合すこと宛も符契の如し。所以に他門の英髦は、印証して之の墳藉を付属し、余宗の賢雄は随喜して之の秘典を奉送す。且く上人の本伝に曰く、(53)

(52) 玄奘訳『大般若波羅蜜多経』（正蔵六・八七〇上～中）。

(53) 出典未詳。

然る間、他宗の章疏を披て得る所の義理の邪正を決せんが為に、其の宗の名匠の講下に投りて、自解の義を述するに、名匠之れを聞きて皆な悉く称嘆す。所謂蔵俊僧都 贈僧正 に謁して、法相宗の法門の自解の義を述するに、蔵俊 屢(しばしば) 聞て仰て曰く、我れ等師資相承せるすら未だ此の義を存ぜず。禅下直(ただ)の人に非ず。疑らくは是れ仏陀の境界なり。論主に遇うと雖も、此れに過ぐべからず。智慧の凝邃なること凡愚の類に非ず。吾れ一期の間、供養を展(の)べんと欲すと云(云)。果して年毎に供物を贈らる人多く之れを瞻る。又た、醍醐寺に三論の名匠(字諱を失す。或いは伝に云く、大納言法印寛雅) 有りと聞きて、投歩して彼の宗の法門の自解の義を述す。名匠聴受して赧然として汗下りて、更に言うこと能わず。随喜の余りに書櫃数合を取り出して曰く、自宗の章疏に於て付属の仁無し。而るに貴禅大いに斯の法門に達せり。悉く以て委附せんと。即ち之れを授与す。又た慶雅法橋に遇うて華厳宗の法門の自解の義を述す。慶雅初めには侮慢して高声に徴詰せしかども、後には舌を結び敢て

詶杭せず。他門の自解の相伝の義に超えたることを感歎して、華厳宗の章疏を白馬に負はせて黒谷に送る。人具(み)な之れを知れり。或る時上人自ら言く、我が性は大巻の書なりと雖も、三遍之れを見れば文暗からず、義分明なりと。将来弘通の八宗の外に仏心宗を加えて九宗に渉り、広く教相を窺(きわ)めて粗(ほぼほぼ)幽致を得たりと云云。惟度(おもんみれば)衆僧中の炙輠(しゃか)、群萌間の明鏡なり已上と。

夫れ一代五時の義理分明にして、悉く揚江九五の鏡に懸け、有空華厳の文釈皎潔として遍く荊山万顆の玉を琢(みが)く。寔に惟れ一天の導師、万古の独歩なり。学者之れを崇重せよ。自解他門の淵源を究め、独見余宗の秘伝に合す。是れ全く他師の及ばざる所なり。唯(ただただ)、吾が祖一人の勝徳なるのみ。夫れ意れば先ず自解他宗の徳能を顕すは、是れ即ち学者をして独悟真宗の霊徳有ることを知らしめんが為なるのみ。又た天台座主顕真、同じき貫長慈鎮、園城の長吏公胤、興福の英髦貞慶、東大の硯学明遍、宝地房の法印証真、竹林房の法印静厳、安居院の法印聖覚、恵光院の法印永弁、

林泉房の法印智海、此等群英は皆な緇林の鸞鳳、学海飛竜、釈門の棟梁、仏家領袖なり。然るに各、上人の所立を服膺し、咸く祖師の法門を信受せり。剰へ師資の礼を致し授受の義を存ず。恭く下の誼を資足す。謹んで二字の状を捧げ、字を名簿の櫃に留め、身を松門の内に容る。加之（しかのみならず）、華夷の皁白遠近の貴賤、晨暮輻湊津を問い、行を立つるもの、済済焉たり、煌煌焉たり。其の従い祔く者の譬へは百川の巨海に帰し、鱗介の亀竜に宗するが猶し。是れ則ち自解大法の霊徳の高昌なる故か。抑（そもそも）又た天機秀発の智弁の卓抜なる故か。於戲（ああ）悲しいかな、曦和の矢走りて急に我が短命を奪い、邪毒の鼓響きて人の五内を破る。『華厳経』に云く、「寧ろ地獄の苦を受くども、諸仏の名を聞くことを得ん。無量の楽を受けずとも、何ぞ仏名を聞かざらん」[54]上已と。夫れ意、常に九品真宗の教風を弄す。誠に班婕妤が団雪の扇を忘れたり。口恒に六字尊号の宝珠を銜（ふく）む。胡んぞ燕の昭王が招涼の珠を求めん。南無阿弥陀仏。

(54) 仏陀跋駄羅訳『華厳経』（正蔵一〇・八三上）。

## 精進苦節勝第十二

夫れ難行苦行は三世諸仏の修習したまへる所、毘尼精進は十方索多の求学する所なり。爰に巨唐終南の邃窟に神僧有りて居す。号して導公大師と曰う。夙に高門を標わし、頓に塵表に出ず。是れ則ち総じては釈氏家の棟梁、別しては浄土門の枢鍵なり。常に囂塵の境界を猒い、恒に孤峰の絶頂を思う。故に南山に蟄籠して西刹を欣求す。大凡そ神機独発して天性不器なり。其の肌膚は氷雪の若し。綽約たること処子に似たり。五穀を食わず、風を吸い、露を飲み、雲気に乗じ、飛竜に御して諸四海の外に遊ぶ。識神凝寂にして能く三摩鉢提を発得して、明らかに九品の依正を照見す。威儀蕭然として忽ちに本律の厳制に超絶し、速かに薄伽筏底の三業に諧当す。本伝に曰く、(55)

是こに、篤勤精苦して頭然を救わんが若し。至乃堂に入るときは則ち合掌踞跪して一心に念仏し、力の竭(つき)るに非ざれば休まず、至乃寒冷にも亦た須く汗を流すことをもちゆ。此の相状を以て至誠を表す。出ては即ち人の為に浄土の法を説きて諸

(55) 出典未詳。

の道俗を化し、道心を発して浄の土行を修せしむ。暫時も利益を為さざること有ること無し。三十余年別の寝処無く、暫くも睡眠せず洗浴を除きて外に曽て衣を脱がず。般舟行道、礼仏方等、以て己が任と為す。戒品を護持して繊毫も犯せず。曽て目を挙げて女人を視ず。一切の名利心に起念すること無し。綺詞戯笑、亦た未だ之れ有らず。所行の処には争て供養を申ぶ。飲食衣服四事豊饒れども皆自ら入れず、並将て廻施す。好食をば大厨に送りて徒衆に供養し、唯、麁悪を食して纔に身を支えることを得たり。乳酪醍醐皆な飲敢せず、諸、親施れば将て阿弥陀経を写すこと十万余巻、画く所の浄土変相、三百余堵、所在の処、壊れたる伽藍及び故塼塔等を見ては、皆悉く営造す。灯を然して明続くこと歳常に絶えず、三衣瓶鉢人をして持洗せしめず、始終改むること無し。諸の有縁を化し、毎に自ら独り行きて衆と共に去かず。人と行けば世事を談論して行業を修するを妨げんことを恐る。又曰く、禅師平生に常に乞食を楽う毎に自ら責めて曰く、釈迦尚乃ち

分衛したまう。善導何人なれば端居して供養を索(もと)めんと。至乃沙弥までに並に礼を受けず。又曰く、初め綽師晋陽に開闡すと聞きて千里を遠しとせず、津を問わんと欲す。時に玄冬の首めに逢う。風落葉を飄して深坑に塡満す。遂に瓶鉢を挈げて中に入りて安坐し一心に念仏す。覚えずして已に数日を度る。乃ち聞空中の声を聞く。曰く前(すす)み行うを得べし。所在遊覆復た罣礙無からんと。遂に坑を出て進程して綽禅師の所に至る。導乃ち自ら阿弥陀仏を念ず。是の如く一声するに則ち一道の光明有りて其の口より出ず。十声より千百声に至るまで、光亦た之の如し。導人に謂て曰く、此の身は猒う可し諸苦逼迫し情偽変易して暫くも休息すること無し乃ち所居の寺前の柳樹に登り西に向いて願じて曰く、願は仏の威神、驟(にわ)かに以て我を接せよ。観音勢至も亦た来りて我を助けよ。我が此の心をして正念を失せず、驚怖を起さず、弥陀法の中に於て以て退堕を生ぜざらしめたまへと願じ畢りて其の樹上より身を投じて自ら絶す。時に京師の士大夫、誠を傾いて帰信し、

咸く其の骨を収めて以て葬す。高宗皇帝、其の念仏するとき、口より光明を出すを知り、又、捨報の時、精至此の如くなるを知りて、寺額を賜りて光明と為す上已と。

竹史の載する所、露点鮮潔なり。誰か貴重せざらん者か。抑(そもそも)又た身に十種の霊徳を周備し、語に九品の真宗を闡揚す。所以に受法の上徳は反て弟子と成り、法相の英髦は推て軌範と為す。凡そ北斗以南、無双の異僧なり。西教激揚第一の高祖なり。瑞応伝に曰く、「仏法東行してより未だ禅師のごときの盛なるは有らず」[56]上已と。這の言誠なる哉。東漸の釈教、皆な悉く吾が大師の腸胃なる者をや。然れば則ち設化六合に充塞し利益八極に盈溢せり。夫れ人魚の油灯も未だ中有旅泊の迷闇を照さず、死に従うの賢佐も黄壌独往の嶮難には伴なはず。『後漢書』に曰く、「猶を小雪を以て沸湯に投るがごとし」[57]と。此れは犯重の小雪を以て尊号の洋銅に投ずるの謂なり。南無阿弥陀仏。

(56) 少康『瑞応伝』(正蔵五一・一〇五下)。
(57)『後漢書』三八、「張宗伝」。

## 頓中頓教勝 第十三

夫れ六即智断一生可弁の頓説は是れ一乗の止観より起これり。不起座、三昧現前の秘談は、乃ち三密の大教より生ぜり。然りと雖ども、未だ生死の果縛即ち大涅槃、無明塵労即ち是れ菩提なりと豁達せざるの日は、本地の三徳甚だ顕れ難く、又た「一切衆生本有薩埵為貪瞋煩悩之所縛故」[58]と達観せざるの時は速証の大覚大いに隔て有り。然るに今、吾が菩薩、大乗頓教一乗海の極談は、之れ与に間有りて懸隔なり。所謂超世本願の玄極は、全く三学式内の推す所に非ず。所以に一念三千の妙観を修せよとも教えず。又た五相三密の観念を凝らせども示さず。只だ格外の一式に任せて、憑を大願業力に繋けしめ、勤を如来の尊号に励ましむる者なり。然る時は則ち依行する者は秋毫の煩惑を断ぜざれども速やかに分段の古郷を出づるなり。高祖大師の曰く、「煩悩を断ぜず涅槃の分を得。焉んぞ思議すべけんや」[59]。宗家の高断に曰く、「命断須臾に安楽に生ず。即ち是れ頓教菩薩蔵なり」[60]と。又た本朝の祖師の曰く、[61]

(58) 伝龍樹『菩提心論』（正蔵三二・五三七下）。
(59) 曇鸞『往生論註』（浄全一・二四一上）。
(60) 善導『般舟讃』（浄全四・五三〇上）。

天台真言皆な頓教と名づく。然れども彼は断惑証理なるが故に、猶お是れ漸教なり。未断惑の凡夫直に三界の長夜に出過することを明かすことは、偏に是れ此の教なり。故に此の教を以て頓中の頓と為す已上と。

原ぬるに夫れ四乗に各利鈍の不同有り。故に断証に亦た遅疾の差降有り。所謂声聞の極利なるは三生を経て四智を究竟し、縁覚の最鈍なるは百劫を送りて一果を証得す。菩薩の利鈍なるは九劫の超次なり。三乗権行の利鈍斯の如し。又た円密仏乗の中に於て大機上根の人一世に透徹し、小機下根の彙は多生に得脱す。是れ則ち一乗実修の早晩なり。『般舟讃』に曰く、(62)

釈迦如来の真報土は清浄荘厳の無勝是なり。娑婆を度せんが為に、化を分けて入る。八相成仏して衆生を度したまう。或いは人天二乗の法を説き、或いは菩薩涅槃の因を説く。或いは漸、或いは頓、空有を明かして人法二障双べ除かしむ。根性利なる者、皆な益を蒙る。鈍根無智なれば開悟し難し。『瓔珞経』の中には漸教を説く。万劫の修功不退を証す。『観経』『弥

(61) 法然『無量寿経釈』（昭法全六八）。
(62) 善導『般舟讃』（浄全四・五三〇上～下）。

陀経』等の説は即ち是れ頓教菩薩蔵なり。一日七日専ら仏を称すれば、命断のとき須臾に安楽に生ず。一たび弥陀の涅槃の国に入れば、即ち不退を得て無生を証すと。

抑遮那大教に依りて速証の相を明からめ、止観上乗に依りて断迷の義を詳するに、対治断を以て権教の漸断と為す。体達断を以て実教の頓断と為す。今一家浄土の所談は対治体達の二道を以て束ねて漸教と名づけ、不断煩悩の一教を以て、別して頓教と称す。其の優劣の次第、卓抜の学者之れを商量せよ。古に曰く、(63)

夫れ尋常の溝には巨魚其の体を還らす所無く、鯢鰌之れが制を為す。歩仞の丘陵には巨獣其の軀を隠す所無く、孽狐の祥と為す、乃至鳥獣は高を厭わず、魚鱉は深を厭わず已上と。

然るに地住の諸聖、皆な吾門に遊ぶ。謂つべし。究竟衍門の大法、了義頓大の洪教なりと。夫れ以れば、不肖の小量、豈に大教を尽くさん。須く知量を閣きて、悲願を仰ぐべし。『仁王』に曰く、「形に常の主無く、神に常の家無し。形と神と尚お離る。豈に国有らんや」(64)と。夫れ禿樹定めて禿非ず。春に遇うて則ち栄え華さ

(63)『荘子』雑篇。

(64) 伝羅什訳『仁王般若波羅蜜経』（正蔵八・八三〇上）。

く。増(かさ)なる氷、何ぞ必ず氷ならん。夏に入りて、則ち洋(ひろ)げ注ぐ。穀芽湿を待ち、卉菓時に結ぶ。本願の機法、其れ然らざらんや。南無阿弥陀仏。

## 小聖住報勝 第十四

夫れ登地登住の大士は、是れ界外報身輔翼の法臣なり。声聞縁覚の小聖は、迺ち界内応身所化の徒弟なり。所以に摩醯首羅宮の成道には四諦二六の法輪を転せず、施鹿林野苑の正覚には究竟大乗の内庫を開かず。然に今吾が弥陀世尊は大悲深重の余り、猶を敗種決定の彙いを憫たまえり。清浄大海衆の中に全く二乗の死尸を簡ばず、無漏実報土の境に専ら孤調の小機を引接す。是れ即ち弥陀願海平等一味の利益、諸仏不共、大悲深重の別化なり。此の義沖邈にして非常の言なれば、常人の耳に入るべからず。故に高祖大師、自徴自記したまえり。所謂、『玄文』に曰く、(65)

問うて曰く、彼の仏及び土、既に報と言はば、報法は高妙にして小聖すら階り難し。垢障の凡夫、云何が入ることを得ん。

(65) 善導『観経疏』(浄全二・一二上)。

答えて曰く、若し衆生の垢障を論ぜば、実に欣趣し難し。正しく仏願に託して以て強縁と作するに由りて、五乗をして斉く入らせしむることを致すと。

又た『群疑論』に曰く、(66)

問う、若し是れ他受用の土なりといわば、云何ぞ地前の凡夫生ずるや。釈して曰く、計るに彼の地前の菩薩、声聞凡夫は未だ遍満真如を証せず、未だ人法二執を断ぜず、識心麁劣なるをもって所変の浄土、地上の諸大菩薩の微細の智心、所変の微妙の受用の浄土には同ずべからず。然るに阿弥陀仏殊勝の本願、増上縁の力を以て彼の地前の諸の小行の菩薩等をして、識心劣なりと雖も如来の本願、勝力に依託して、還て能く彼の地上菩薩の所変の浄土、微妙広大清浄の荘厳に同くして、亦た見ることを得せしめたまうが故に、他受用の土に生ずと名づく已上と。

師資の解釈、倶に予め来者の問難を顧て、委く尽理の詳勘を致す。末学疑慮を致すこと莫れ。

(66) 懐感『釈浄土群疑論』（浄全六・六下）。

請い問う、曰く、其の託仏願とは、摂凡五箇の願なり。又た、正しき摂小の別願は、声聞無数の一願是れなり。

曰く敢えて問う、曰く仏地会座の声聞は只(ただただ)是れ暫見にして永住に非ず。今と不類なり。高識の人知ぬべし。従上の所談は伝許伝説す。智人知るべきのみ。因論生論す。

問うて曰く、宗師那なる経文を引きて、安養報土の義を成立し、何なる明拠に依りて報身大寂の旨を印証するや。

答えて曰く、『双巻』『同性』等の三典を引きて、安楽第二の義を証し、『大品般若』の一文に依りて、報身滅度の旨を立つるなり。

問うて曰く、如何が報身入滅の義を証するや。

答えて曰く、難家、『授記経』に依りて、報身常住、応化無常の義趣を成立して、以て弥陀報身の立義を沮(はば)み詰す。宗師、『大品』の明文に依りて報身の入滅を成す。

問うて曰く、其の義如何。

答えて曰く、此の義、学者大いに致迷して、解釈の指帰を失せり。今謂く、大師の密意に言く、夫れ博く一代八万の衆典を披き

て、細く三身果徳の相貌を明らむるに、常住無常の義相を説くこと、其の文一準ならず。或は法身凝然報応無常と説く経有り。所謂、『涅槃』に曰く、「如来は非常なり。智有るを以ての故に、常法は無智なり、猶し虚空の如し」[67]と。『大品』に曰く、「何等か有為の報、若は法の生往異滅、四念処乃至十八不共法及び一切智、是れを有為の報と名く」[68]上已と。『大論』に曰く「十八不共は無為なりと雖も、作法を以ての故に是を有為の法と為す」[69]上已と。『唯識論』に曰く、[70]

四智心品は所依常なるが故に断ずることも尽くることも無きが故に。亦た説きて常と為す。自性常には非ず。因より生ずるが故に生ずる者は滅に帰す。一向に記したまえる故に上已

と。

此の外、心地の深蜜、『瑜伽師地』等の諸大乗経論の中に多く法身常住、報応無常の義を明せり。慈恩大師、嘉祥大師等、多く此の義を存す。且く嘉祥の『法華の疏』に曰く、[71]

問う、三種如来の常無常、云何。答う、亦た四門有り。一に

(67) 宥範『大日経疏妙印鈔』（正蔵五八・四四中）に同文あり。
(68) 澄観『大方広仏華厳経随疏演義鈔』（正蔵三六・三四六上）に同文あり。
(69) 龍樹造『大智度論』（正蔵二五・三八二上）。
(70) 護法造『成唯識論』（正蔵三一・五七下）。
(71) 出典未詳。

は但無常、謂く化身なり。二には但常、謂く法身なり。三には亦たは常、亦たは無常、応身なり。内応と法身と相応すれば、法身も常、応身も亦た常なり。外応浄土にして作仏するが故に、是れ無常なり。問う、何れの文に出づるや。答う、諸仏の師とする所は、所謂る法なり。法常なるを以ての故に諸仏も亦常なり。此れは是れ常の文なり。七巻の『金光明経』に曰く、応化二身は是れ仮名有るなり。念滅するが故に名づけて無常と為す。四には非常非無常とは、此れ始めは正仏、『中論』に明すが如し。法身は常無常の四句を絶す。此の品の後の文に法身を明して、非実非虚、非如非異とす上已と。

或は三身常住と説く経有り。所謂『涅槃』に云く、「無常を滅するに因て常色を獲得す。受想行識も亦た復た是の如し」(72)上已と。『玄義』第十に『浄名経』を引きて曰く、「仏身は無為にして諸数に堕せずと。金剛の体なり。何ぞ疾に何ぞ悩まん」(73)上已と。『大集経』に云く、「如来の智慧は無辺際にして三種有為の相を遠離す」(74)上已と。又た『輔行』第一に曰く、「三身相即して暫も離るる時無し。

(72) 澄観『大方広仏華厳経随疏演義鈔』(正蔵三六・六一八下)。
(73) 智顗『法華経玄義』(正蔵三三・八〇二下)。
(74) 曇無讖『大方等大集経』(正蔵一三・一五下)。

既に法身一切処に徧ずと許す。報応未だ嘗て法身を離れず、況や法身の処に二身常に在り。故に知ぬ、三身諸法に徧ず、何ぞ独法身ならん」[75]上已と。『浄名の疏』に曰く、「報身果満にして凝然常住なり」[76]上已と。『暹之記』に曰く、「若し金光明、摂論等の説に依れば、如来報身は是れ凝然常なり」[77]上已と。『守護章』に曰く、「有為の報仏は夢裏の権果、無作の三身は覚前の実仏なり」。又た曰く、「権教の三身は未だ無常を免れず、実教の三身は倶体倶用なり」[78]上已と。又た『法華』の寿量の本地、無作の三身等は正しく是れ三身常住の明拠なり云云。又た弘法大師の『真言問答』に曰く、[79]

問う、其の意云何。

答う、三身一体の釈迦如来なり。

問う、機根不同にして三身の用異り。何ぞ一体と云わんや。

答う、名は三箇なりと雖も、理体一なる故に一体と云うのみ。

問う、若し体一なりと言わば、『六波羅蜜経』に、仏の応身は刹那に遷変す、化身の仏は疾く涅槃の功徳に入る、法身は湛然常住なり、と云うに違す。

(75) 湛然『止観輔行伝弘決』（正蔵四六・一五二上）。
(76) 智顗『維摩経略疏』（正蔵三八・六三六中）。
(77) 出典未詳。
(78) 最澄『守護国界章』（正蔵七四・二二二下）。
(79) 空海『真言雑問答』（『弘法大師全集』一一・一八六～一八八）。

答う、其の義違せず、

問う、爾らば其の意何ん。

答う、応化如来、遷滅すと言わば、衆生の機見にして仏の遷滅に非ず。

問う、何を以て爾云うや。

答う、『不空羂索経』に云く、一切の如来の三身一体にして皆毘盧遮那の相好身に等しと。是れを以て之れを知るに、法身を離れたる応化にも非ず、応化を離れたる法身にも非ず、法身常住なれば応化も随って常なりということを。

問う、若し応化常ならば何が故ぞ『最勝王経』に「前の二種の身は是れ仮名の有なり」と云わんや。

答う、其の仮名とは、大悲の応用、縁に随て隠るるが如く縁に随て顕るるが如しと。故に仮名と云う。

問う、大悲の仮に非ず。已に経の文言顕然なり。何意を以てか強論を生ずるや。

答う、彼の応化の用は本と慈悲より起る。慈悲は即ち是れ仏心を

以ての故に、仏心豈に遷滅仮有なるべけんや。

問う、何の経の中に「慈悲を仏心と為す」と云うや。

答う、『観無量寿経』に云く、「其の仏心とは大慈悲是れなり。無縁の慈を以て諸の衆生を摂す」と。是の如くの文に依りて、応化を常なりと云う。又応化実に滅せば法身も滅すべし。法身常なるを以て応化も亦た常なり。故に『法華経』に云く、「衆生を度せんが為の故に方便の涅槃を現ず、而れども、実には滅度せず、常に住して此れ説法す」と、是れ故に応化名有るを以て法身の名を云うこと有り。法身の号有ること無くんば、応化の号を云うこと無し。何を以ての故に、勝義諦の中には一切の名無きを以て、猶を法身の名も無し。況や応化の号有らんや。故に知ぬ。三身の体は一念も離れず、人に随て三名有り。真理の中には一体も無し。

問う、是の如くの三身一体に衆生の為に説法する時は、三身共に説くと為んや。当に云何。

答う、義を以て之れを言わば、共説各説有るべし。

問う、如何なるが其の共各の意なる。

答う、三身一体なるが故に釈迦説法すれば即ち報法も説き、法身説法すれば是れ報化も説く意を以て知るべし。三身の異と云うは機根の不同なり。自受他受随自、理相融すと雖も、深浅顕密の旨無きに非ず。自ら之れを覚るべし已上と。

又た、天台円宗の意、三身並に常住無常の二義有ることを明す。且く『法華文句』第九に云く、(80)

三身に並に非滅唱滅の義有り。『浄名』に云うが如く、「法は本と不生なり。今則ち滅無し」と。即ち是れ法身の非滅なり。又た云く、「是れ寂滅の義なり」と。即ち是れ唱滅なり。何となれば、若し已に了達すれば寂滅を唱えず、末了の者の為に滅を唱るのみ。若し照寂と言はば、即ち是れ滅と唱う。若し寂照と言はば、即ち是れ生を唱うるなり。夫れ法身とは、非生非滅なりと雖も、亦た生滅有り。若し迷心執著すれば、即ち煩悩生じて智慧滅す。若し解心、染無くれば即ち智慧生じて煩悩滅す。惑を滅して解を生ずるは、此れは是れ無常の滅なり。若し解生して惑滅するは即ち是れ寂滅なり。此の生

(80) 智顗『法華文句』（正蔵三四・一三三中）。

滅は悉く法性に約して弁ず。若し迷解の二縁無くんば則ち此の生滅有りと唱えず。報身の非滅唱滅とは、誰が智慧有り、誰が煩悩有りて智慧能く破すと言うや。此れは即ち明闇相除かず、即ち報身不滅の義、衆生了らず。此れを聞きて便ち其れ即ち是れ仏なりと謂いて、憍恣を生じて復た修道せず、故に復た唱て道能く惑を滅すと言う。煩悩有る時は則ち智慧無し。智慧有る時は則ち煩悩無し。豈に智慧能く煩悩を滅するに非ずや。応身の非滅唱滅とは、応は是れ法報の用なり。体既に滅無し、用豈に窮り有らんや。即ち応身の不滅なり。但、衆生若し常に仏を見れば、則ち憍恣を生ずるが為の故に、我れ今夜に於て滅度を取るべしと唱う。又、法身は当体に不滅を明す。報身に不滅を説くは必ず法身に約す。理を以て論ずれば、智慧能く破すといわば、為に到るが故に破するや。到らざるが故に破するや。為に共なりや。為に独なりやと。此の如くを推すに理能破の功有ること無し、即ち智慧惑を滅せざる義なり。智慧有るときは則ち煩悩無きに就ては、即ち是

れ慧能く惑を滅す。応身不滅を説く須く法報に約すべし。法報常然なれば応用絶えず、衆生尽きざれば即ち滅度せず。若し法身は当体に不生滅を論ず。報身は能く生滅無しと了達す。応身は相続して生滅せず上已と。

又た、空宗三論、常無常の二義を存す。

且く『大乗玄論』に曰く、

若し常無常とは、別して言うことを為すは、法応二身を常と為す。化身は無常なり。通じて言うことを為すは、三身倶に常なり。倶に無常なり。化身は大悲を以て体と為すが故に是れ常なり。法身には隠顕有るが故に、義説すれば無常なり。応身は始起の義なれば是れ無常なり。『金光明経』に「応化の二身無常」[81]と云うは、迹を開して本に合するなり上已と。

『寿量品の疏』に曰く、[82]

寿量に亦た三種有り、化仏の寿量は有始有終なり。故に二乗の人の為に八相成道して王宮に生を現ず。双林に滅を示す。二に報仏の寿量は有始無終なり。故に下の文に曰く、我れ本

(81) 慧沼『金光明最勝王経疏』（正蔵三九・二三〇下）。

(82) 吉蔵『法華義疏』（正蔵三四・六〇三上）。

と菩薩の道を行じて成ずる所の寿命、今猶お未尽なり。行因縁を以て初て仏果を証す。此の故に始め有り、一たび証して已後、湛然として滅せず、故に尽滅有ること無し。三に法身仏の寿量は本より有て不生不滅、無始無終なり已上。

『法華玄論』第九に曰く、(83)

問う。余の二身は但だ是れ無常なり。亦た是れ常なることを得るや。

答う。義に通別有り。通じて論を為さば、三身皆な常なり。法身は始終無し。不生滅の故に常なり。法身有ることを以て常に菩薩を化して息む時無きが故に。応身も亦た常なり。二乗を化して亦た息む時無きが故に。化身亦た常なり。但だ此の縁息み、彼の縁息まざるに於てが故に。滅にして実には不滅と言うなり。『華厳』に曰うが如し。譬えば、大火遍く諸の草を焼くに、此の処の草は尽きるが故に火滅すと言い、彼の処の草は尽きざるが故に滅せずと言うが如し已上と。

或いは偏えに三身無常を説くの経有り。所謂る『大品涅槃』如化

(83) 吉蔵『法華玄論』（正蔵三四・四三九上）。

品の中に「是一切法畢竟性空乃至涅槃亦皆如化」[84]と説かるは、此れは法身無常の相貌を明かし、「色即是化受想行識即是化 至乃 一切種智即是化」[85]と宣べたるは、是れ報応無常の義相を顕わすなり。抑(そもそも)従上の三義、散じて諸経に在り。高識博覧の人の能く知る所なり。已上、三身常無の三義を明かし竟んぬ。

問うて曰く、実に是れ此の三義、衆典に見たり。然るに今、宗師、三身無常の説を引きて如何が報身入滅の義を証するや。

答えて曰く、難家、『授記経』に依って「報身常住永無生滅」[86]の責を致す。大師、之れを答えとして『大品般若』に依って之れを観れば、果地の三身皆な同じく無常変滅の法なり。若し爾らば、『授記』の中に報身入滅の相を説くこと、何の相違か有らんや。然れば則ち、縦令い吾れ法身入滅の難を聞くと雖も、更に駭動すべからず。然る所以は、『大品』に「涅槃如化」の誠言有るが故なり。況んや報身転変の旨に於ては全く疑恐すべからず云云。

此の判釈、寔に以て高妙なり。尋常の諸師の上の一層級の詳勘なり。夫れ以れば、通論諸家の謬解を責めんが為に超えて世親論

(84) 出典未詳。鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜経』（正蔵八・四一六上）に同文あり。

(85) 出典未詳。鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜経』（正蔵八・四一五下）に同文あり。

(86) 出典未詳。善導『観経疏』（浄全二・一一上）に同文あり。

主を破し、報身入滅の一義を立てんが為に跳ねあがって法身無常と存す。是れ即ち巧弁の高判なり。抑又た甚深の詳勘なり。孰れか之れを信遵せざらんや。

問うて曰く、胡んの道理有ればなり。牟尼至尊、一代五十年、三百六十余会の中に於て、常に従上の三義を説きたまうや。

答えて曰く、夫れ世俗建立門の日は且らく三身の名体有り。勝義皆空の時は永く六身の名体を亡けん。又た得証未廃の前には三身且らく歴歴たり。廃証無得の後には四身永く絶絶たり。智人知んぬべし。

問うて曰く、此等の三義は是れ教門の施設とや為ん、是れ行者の感見とや為ん、如何。

答えて曰く、三義皆な行者の感見に有り。故に説教も亦た実に此の三説を存ずるのみ。

問うて曰く、此等の三義に於て、傍正の不同有りや。

答えて曰く、之れ無し。所以は何ん。三観倶に息患の勝縁なるが故に。存没同じく解脱の良因なる故なり。

夫れ今、小師広く経論の明文を勘え、深く高祖の密意を得て、従上の一義を建立す。先代にも未だ此の判断を聞かず。将来にも亦た此の料簡有らず。若し後生有りて此の義を存立せば、正しく是れ小愚の徒弟なるべし。抑上来の所立、甚深にして亦た奥妙なり。若し此の義を看取して善く滋味を解すること有らば、此れは是れ直也の人には匪ず。若し此の旨に致迷して反って誹訕を生ずること有らば、斯れは是れ庸愚の輩なるべし。来者、指を於是に染めよ。来者、指を於是に染めよ。古に曰く、(87)

同じく有りて必ず異あることは、昔自り然る攸なり。楽しみ尽きて、哀れみ生ずるが古の常の事なり。以みるに連繕勝が斧は十二由旬の鉄城を切り、総油縛が剣は一刀に千人の首を落とす。

尊号の利剣、其れ然らざらんや。南無阿弥陀仏。

## 凡愚住報勝 第十五

夫れ善趣前後の索多は応身如来の化益を蒙り、登地・登住の大

(87) 出典未詳。

士は報身覚王の開道に預かる。然るに今、西方の行人は一分の伏智をも生ぜず、毫釐の惑障をも断ぜずと雖も、唯だ散心称揚の功力に依りて実報高妙の報土に詣ず。此れ即ち弥陀の弘願、難思の霊徳なり。諸仏如来、絶離の強縁なり。

玄文に云く、[88]

弘願と言うは、『大経』に説くが如し。一切善悪の凡夫、生ずることを得る者は皆な阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁と為さずということ莫し已上。

又た上に引く所の「由託仏願以作強縁」の高判、及以び「依託如来本願勝力」の解釈、之れと合して料簡せよ。以れば頓説の梵席に凡夫大根性の者有りと雖も、只だ是れ暫らく影現の報土に居るのみにして、未だ豎次の実報に入らず。吾が宗の所談は然らず。夫れ具縛の痴薩埵等、忝けなくも如来摂凡の悲願に乗じて、一たび無漏実報の浄刹に詣ずれば、永く退転せずして終に覚位に至る。焉んぞ思議すべけん。於(ああ)、彼の秦皇、兕虎の猛威を振るいしや。蓬莱の島を求めて人に欺むかられん。漢武の大賢の佳名を播きし

(88) 善導『観経疏』（浄全二・二上）。

や。神仙の薬を温ねて世に軽んぜらる。勇士をも簡ばざるは是れ無常の殺鬼、豪賢をも論ぜざるは乃ち奪精の猛神なり。『宝積経』に曰く、[89]「南無仏と称念する者は語業空しからず、是の如き語業をば執火炬と名づく。能く煩悩を焼く」と。南無阿弥陀仏。

## 不求世楽勝 第十六

夫れ十二願王に奉仕するの彙いは現在に五種の勝益を求め、千手大士に帰依するの輩は此れ当に五八の悉地を望む。然るに今、安養の行者は所修の行を廻して、報刹の処に向かい、能求の心を励まして、界外の国を欣えり。若し此の義篇を約して之れを論ぜば、西方の行人を以て専ら大度測量勇健勇鋭の上機と称し、正しく上根上智好人志幹の大士と名づけん。

夫れ如来は「若念仏者当知此人是人中分陀利華」[90]と歎じ、大師は「人中上上人、人中希有人、人中最勝人」[91]と褒したまうは、是れ此の謂いか。凡そ現世の求願は如来の意を痛しめ、当来の得脱は慈父の懐を叶える者なり。抑設い求男求女、念に応じて来たり。

(89) 菩提流支訳『大宝積経』（正蔵一一・二六中）。
(90) 畺良耶舎訳『観無量寿経』（浄全一・五二）。
(91) 善導『観経疏』（浄全二・七一上）

増福増寿、縁に随って感ずとも是れ全く冥旅の貯えに非ず。又た九山を海と成し、八海を山と成し、水を燃くこと油の如くにし、樹を兕(たわ)むること水の如くにすとも、更に黄壌の資にあらず。道人思察せよ。

請い問う曰く、他仏に帰仰する行人の中に菩提を求むるの輩無きに非ず。然りと雖も細人、麁人、二倶犯過の道理有り。学者商量せよ。

請い問う曰く、現生護念増上縁有ること、只だ是れ如来地瑟佗曩の力にして、全く行者素望の現益に非ず。所難の趣、今と不類なり。思いを知んぬべし。於戯(ああ)、一毫の惑障を伏断せざる凡夫等、一向に菩提を求めて、更に現益を望まざることは、聖道の学者の絶離する所なり。余教の行人の及ばざる所なり。竜子少なしと雖も、雨を興すの徳を具す。松栢(しょうはく)細なりと雖も、雲を陵ぐの気有りとは、是れ称名行者の謂いなり。夫の余教の行人、兼て現利を求むるは、毒薬倶に服するが如く、西方の修者の偏えに当益を欣うは天の甘露を餌するに似たり。二人の損益、学者自ら知れ。夫れ

王夫人、甘泉を去りしかば、漢皇、別離の哀戚に沈み、楊玉妃、蓬洞に帰りしかば、唐帝、違約の愁涙を落す。有為の暴風、花の体をも惜しまず。遷変の厳霜は玉顔をも侵損す。

夫れ称名の音は毒鼓の如し。一たび之れを聞けば無明の敵を殺す。尊号の徳は薬樹に同じ。僅かに之れを持つれば輪廻の瘵を治す。南無阿弥陀仏。

『浄土十勝箋節論』巻上　　坤上終